

四半期報告書

(第11期第3四半期)

株式会社 池田泉州ホールディングス

四 半 期 報 告 書

- 1 本書は四半期報告書を金融商品取引法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用し提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した四半期報告書に添付された四半期レビュー報告書及び上記の四半期報告書と同時に提出した確認書を末尾に綴じ込んでおります。

目 次

頁

【表紙】	1
第一部 【企業情報】	2
第1 【企業の概況】	2
1 【主要な経営指標等の推移】	2
2 【事業の内容】	2
第2 【事業の状況】	3
1 【事業等のリスク】	3
2 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】	3
3 【経営上の重要な契約等】	9
第3 【提出会社の状況】	10
1 【株式等の状況】	10
2 【役員の状況】	14
第4 【経理の状況】	15
1 【四半期連結財務諸表】	16
2 【その他】	27
第二部 【提出会社の保証会社等の情報】	28

四半期レビュー報告書

確認書

【表紙】

【提出書類】 四半期報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条の4の7第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2020年2月7日

【四半期会計期間】 第11期第3四半期(自 2019年10月1日 至 2019年12月31日)

【会社名】 株式会社池田泉州ホールディングス

【英訳名】 Senshu Ikeda Holdings, Inc.

【代表者の役職氏名】 取締役社長兼CEO 鵜川 淳

【本店の所在の場所】 大阪市北区茶屋町18番14号

【電話番号】 大阪(06)4802局0181番(代表)

【事務連絡者氏名】 執行役員企画総務部長 塚越 治

【最寄りの連絡場所】 大阪市北区茶屋町18番14号
株式会社池田泉州ホールディングス 企画総務部

【電話番号】 大阪(06)4802局0013番

【事務連絡者氏名】 執行役員企画総務部長 塚越 治

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

		2018年度 第3四半期連結 累計期間	2019年度 第3四半期連結 累計期間	2018年度
		(自 2018年 4月1日 至 2018年 12月31日)	(自 2019年 4月1日 至 2019年 12月31日)	(自 2018年 4月1日 至 2019年 3月31日)
経常収益	百万円	67,462	65,548	97,303
経常利益	百万円	5,450	4,131	9,698
親会社株主に帰属する 四半期純利益	百万円	3,775	3,501	—
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	—	—	6,139
四半期包括利益	百万円	2,357	8,699	—
包括利益	百万円	—	—	9,316
純資産額	百万円	244,641	242,284	236,462
総資産額	百万円	5,496,034	5,489,418	5,450,878
1株当たり四半期純利益	円	11.27	11.16	—
1株当たり当期純利益	円	—	—	18.40
潜在株式調整後 1株当たり四半期純利益	円	10.56	10.48	—
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	円	—	—	17.66
自己資本比率	%	4.41	4.37	4.30

		2018年度 第3四半期連結 会計期間	2019年度 第3四半期連結 会計期間
		(自 2018年 10月1日 至 2018年 12月31日)	(自 2019年 10月1日 至 2019年 12月31日)
1株当たり四半期純利益	円	2.85	5.98

(注) 1 当社及び連結子会社の消費税及び地方消費税の会計処理は、主として税抜方式によっております。

2 自己資本比率は、((四半期)期末純資産の部合計－(四半期)期末新株予約権－(四半期)期末非支配株主持分)を(四半期)期末資産の部の合計で除して算出しております。

2 【事業の内容】

当第3四半期連結累計期間において、当社及び当社の関係会社が営む事業の内容については、重要な変更はありません。また、主要な関係会社の異動は、以下の通りであります。

〔その他〕

池田泉州モーゲージサービス株式会社及びエイ・ディ安定収益追求ファンド匿名組合は、清算が終了したため、連結の範囲から除外しております。

関西イノベーションネットワーク投資事業有限責任組合に出資し、第2四半期連結会計期間より連結の範囲に含めております。

この結果、2019年12月31日現在では、当社及び当社の関係会社は、当社、連結子会社23社及び持分法適用関連会社2社により構成されることとなりました。

なお、第1四半期連結会計期間において、報告セグメントの区分を変更しております。詳細は、「第4 経理の状況 1 四半期連結財務諸表 注記事項 (セグメント情報等) セグメント情報」の「3 報告セグメントの変更等に関する事項」をご参照ください。

第2 【事業の状況】

1 【事業等のリスク】

当第3四半期連結累計期間において、当四半期報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項の発生又は前事業年度の有価証券報告書に記載した「事業等のリスク」についての重要な変更はありません。

なお、重要事象等は存在していません。

2 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

以下の記載における将来に関する事項は、当四半期連結会計期間の末日現在において判断したものであります。

(1) 財政状態及び経営成績の状況

経営成績の分析

① 連結粗利益

当第3四半期連結累計期間の連結粗利益については、資金利益並びに役員取引等利益がそれぞれ5億56百万円並びに3億51百万円減少しましたが、その他業務利益が11億16百万円増加したことから、前第3四半期連結累計期間比2億9百万円増加して、402億40百万円となりました。

イ 資金利益

当第3四半期連結累計期間の資金利益については、資金調達費用が前第3四半期連結累計期間比18億6百万円減少しましたが、貸出金利息並びに有価証券利息配当金などの資金運用収益も前第3四半期連結累計期間比23億62百万円減少したことから、前第3四半期連結累計期間比5億56百万円減少して、307億14百万円となりました。

ロ 役員取引等利益

当第3四半期連結累計期間の役員取引等利益については、証券関連業務並びに預金・貸出業務が増加したことを主因として、役員取引等収益が前第3四半期連結累計期間比4億63百万円増加しましたが、役員取引等費用も前第3四半期連結累計期間比8億14百万円増加したことから、前第3四半期連結累計期間比3億51百万円減少して、105億14百万円となりました。

ハ その他業務利益

当第3四半期連結累計期間のその他業務利益については、国債等債券関係損益が前第3四半期連結累計期間比10億86百万円改善したことを主因として、前第3四半期連結累計期間比11億16百万円増加して、9億88百万円の損失となりました。

② 経常利益

連結粗利益は前第3四半期連結累計期間比2億9百万円増加して、402億40百万円となりました。また、営業経費は前第3四半期連結累計期間比7億86百万円減少して、358億28百万円となり、与信関連費用は前第3四半期連結累計期間比3億8百万円増加して、21億51百万円となり、株式等関係損益は株式等売却益の減少により前第3四半期連結累計期間比16億68百万円減少して、12億24百万円の利益となりました。以上の結果、当第3四半期連結累計期間の経常利益は前第3四半期連結累計期間比13億19百万円減少して、41億31百万円となりました。

③ 親会社株主に帰属する四半期純利益

経常利益は前第3四半期連結累計期間比13億19百万円減少して、41億31百万円となり、特別損益を計上後の税金等調整前四半期純利益は、前第3四半期連結累計期間比10億69百万円減少して、42億90百万円となりました。法人税等合計は前第3四半期連結累計期間比7億22百万円減少して、7億96百万円となったことから、親会社株主に帰属する四半期純利益は前第3四半期連結累計期間比2億74百万円減少して、35億1百万円となりました。

主要損益の状況

	前第3四半期連結累計 期間 (A) (百万円)	当第3四半期連結累計 期間 (B) (百万円)	増減 (B) - (A) (百万円)
連結粗利益	40,031	40,240	209
資金利益	31,270	30,714	△556
役務取引等利益	10,865	10,514	△351
その他業務利益	△2,104	△988	1,116
営業経費 (△)	36,614	35,828	△786
与信関連費用 (△)	1,843	2,151	308
株式等関係損益	2,892	1,224	△1,668
持分法による投資損益	26	8	△18
その他	958	637	△321
経常利益	5,450	4,131	△1,319
特別損益	△91	159	250
税金等調整前四半期純利益	5,359	4,290	△1,069
法人税等合計 (△)	1,518	796	△722
法人税、住民税及び事業税 (△)	892	635	△257
法人税等調整額 (△)	625	161	△464
四半期純利益	3,840	3,493	△347
非支配株主に帰属する四半期純利益 (△) (△は非支配株主に帰属する四半期純損失)	64	△7	△71
親会社株主に帰属する四半期純利益	3,775	3,501	△274

連結粗利益 = (資金運用収益 - 資金調達費用) + (役務取引等収益 - 役務取引等費用)
+ (その他業務収益 - その他業務費用)

セグメントごとの業績につきましては、「銀行業」では、経常収益が前第3四半期連結累計期間比16億43百万円減少の549億20百万円、セグメント利益は前第3四半期連結累計期間比4億90百万円減少の48億16百万円となりました。また、「リース業」では、経常収益が前第3四半期連結累計期間比4億83百万円増加の83億34百万円、セグメント利益は前第3四半期連結累計期間比3億19百万円減少の31百万円の赤字となり、証券業務やクレジットカード業務等を行う「その他」では、経常収益が前第3四半期連結累計期間比8億54百万円減少の53億19百万円、セグメント利益は前第3四半期連結累計期間比5億87百万円減少の1億50百万円の赤字となりました。

なお、報告セグメントは、従来、銀行業のみでありましたが、「リース業」について量的な重要性が増したため、第1四半期連結会計期間より「銀行業」及び「リース業」に変更しており、当第3四半期連結累計期間の比較・分析は、変更後の区分に基づいております。

財政状態の分析

① 預金残高

当第3四半期連結会計期間の預金残高は、銀行業において、個人預金が増加したことから、前連結会計年度比412億円増加して、4兆9,867億円となりました。

	前連結会計年度 (A) (百万円)	当第3四半期連結会計 期間 (B) (百万円)	増減 (B) - (A) (百万円)
預金	4,945,548	4,986,783	41,235
うち個人預金	3,842,757	3,888,980	46,223

② 貸出金残高

当第3四半期連結会計期間の貸出金残高は、銀行業において、地元中小企業への事業性貸出が増加したことを主因として、前連結会計年度比93億円増加して、3兆9,223億円となりました。

	前連結会計年度 (A) (百万円)	当第3四半期連結会計 期間 (B) (百万円)	増減 (B) - (A) (百万円)
貸出金	3,913,086	3,922,394	9,308
うち住宅ローン	1,758,960	1,769,402	10,442

③ 有価証券残高

当第3四半期連結会計期間の有価証券残高は、銀行業において、債券の償還並びに外国証券の売却などを行ったことから、前連結会計年度比50億円減少して、6,077億円となりました。

	前連結会計年度 (A) (百万円)	当第3四半期連結会計 期間 (B) (百万円)	増減 (B) - (A) (百万円)
有価証券	612,741	607,721	△5,020

(参考)

① 国内・国際業務部門別収支

当第3四半期連結累計期間の資金運用収支は、国際業務部門では前第3四半期連結累計期間比32.6%増加しましたが、国内業務部門では前第3四半期連結累計期間比2.1%減少した結果、合計では前第3四半期連結累計期間比1.8%、5億60百万円減少しました。

役務取引等収支は、国内業務部門では前第3四半期連結累計期間比3.2%減少し、国際業務部門では前第3四半期連結累計期間比横ばいとなった結果、合計では前第3四半期連結累計期間比3.2%、3億51百万円減少しました。

その他業務収支は、国際業務部門では前第3四半期連結累計期間比150.5%減少しましたが、国内業務部門では83.2%増加した結果、合計では前第3四半期連結累計期間比53.0%、11億16百万円増加しました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前第3四半期連結累計期間	31,004	273	31,278
	当第3四半期連結累計期間	30,355	362	30,718
うち資金運用収益	前第3四半期連結累計期間	32,536	2,788	35,324
	当第3四半期連結累計期間	31,442	1,510	32,952
うち資金調達費用	前第3四半期連結累計期間	1,531	2,514	4,045
	当第3四半期連結累計期間	1,087	1,147	2,234
役務取引等収支	前第3四半期連結累計期間	10,787	77	10,864
	当第3四半期連結累計期間	10,437	77	10,514
うち役務取引等収益	前第3四半期連結累計期間	15,511	156	15,667
	当第3四半期連結累計期間	15,974	157	16,131
うち役務取引等費用	前第3四半期連結累計期間	4,723	78	4,801
	当第3四半期連結累計期間	5,536	79	5,615
その他業務収支	前第3四半期連結累計期間	△3,049	944	△2,105
	当第3四半期連結累計期間	△511	△477	△988
うちその他業務収益	前第3四半期連結累計期間	1,070	1,535	2,605
	当第3四半期連結累計期間	1,383	3,296	4,679
うちその他業務費用	前第3四半期連結累計期間	4,120	590	4,710
	当第3四半期連結累計期間	1,894	3,773	5,667

- (注) 1 国内業務部門は、当社及び連結子会社の円建取引であります。
2 国際業務部門は、連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。
3 資金調達費用は、金銭の信託運用見合費用(前第3四半期連結累計期間8百万円、当第3四半期連結累計期間4百万円)を控除して表示しております。
4 資金運用収益及び資金調達費用の合計欄の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間の資金貸借の利息であります。
5 その他業務収益及びその他業務費用の合計欄の上段の計数は、国内業務部門と国際業務部門の間に相殺される金融派生商品損益であります。

② 国内・国際業務部門別役務取引の状況

当第3四半期連結累計期間の国内業務部門の役務取引等収益は、証券関連業務並びに預金・貸出業務などを中心に前第3四半期連結累計期間比3.0%増加し、159億74百万円となりました。一方、役務取引等費用は、前第3四半期連結累計期間比17.2%増加して、55億36百万円となりました。また、国際業務部門の役務取引等収益は1億57百万円となり、役務取引等費用は79百万円となりました。この結果、全体の役務取引等収益は、前第3四半期連結累計期間比3.0%増加して、161億31百万円となり、役務取引等費用は、前第3四半期連結累計期間比17.0%増加して、56億16百万円となりました。

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前第3四半期連結累計期間	15,511	156	15,668
	当第3四半期連結累計期間	15,974	157	16,131
うち預金・貸出業務	前第3四半期連結累計期間	3,032	—	3,032
	当第3四半期連結累計期間	3,117	—	3,117
うち為替業務	前第3四半期連結累計期間	1,716	155	1,872
	当第3四半期連結累計期間	1,726	156	1,883
うち証券関連業務	前第3四半期連結累計期間	1,295	—	1,295
	当第3四半期連結累計期間	1,489	—	1,489
うち代理業務	前第3四半期連結累計期間	217	—	217
	当第3四半期連結累計期間	228	—	228
うち保護預り・貸金庫業務	前第3四半期連結累計期間	404	—	404
	当第3四半期連結累計期間	394	—	394
うち保証業務	前第3四半期連結累計期間	1,312	0	1,313
	当第3四半期連結累計期間	1,340	0	1,341
うち投資信託・保険販売業務	前第3四半期連結累計期間	5,183	—	5,183
	当第3四半期連結累計期間	5,122	—	5,122
役務取引等費用	前第3四半期連結累計期間	4,723	78	4,802
	当第3四半期連結累計期間	5,536	79	5,616
うち為替業務	前第3四半期連結累計期間	378	78	457
	当第3四半期連結累計期間	389	79	469

(注) 1 国内業務部門は、当社及び連結子会社の円建取引であります。

2 国際業務部門は、連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。

③ 国内・国際業務部門別預金残高の状況

○ 預金の種類別残高(末残)

種類	期別	国内業務部門	国際業務部門	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前第3四半期連結会計期間	4,921,753	15,106	4,936,860
	当第3四半期連結会計期間	4,972,273	14,509	4,986,783
うち流動性預金	前第3四半期連結会計期間	2,703,828	—	2,703,828
	当第3四半期連結会計期間	2,878,952	—	2,878,952
うち定期性預金	前第3四半期連結会計期間	2,190,939	—	2,190,939
	当第3四半期連結会計期間	2,060,686	—	2,060,686
うちその他	前第3四半期連結会計期間	26,985	15,106	42,092
	当第3四半期連結会計期間	32,634	14,509	47,144
譲渡性預金	前第3四半期連結会計期間	—	—	—
	当第3四半期連結会計期間	—	—	—
総合計	前第3四半期連結会計期間	4,921,753	15,106	4,936,860
	当第3四半期連結会計期間	4,972,273	14,509	4,986,783

- (注) 1 国内業務部門は、当社及び連結子会社の円建取引であります。
 2 国際業務部門は、連結子会社の外貨建取引であります。ただし、円建対非居住者取引、特別国際金融取引勘定分等は国際業務部門に含めております。
 3 流動性預金＝当座預金＋普通預金＋貯蓄預金＋通知預金
 4 定期性預金＝定期預金＋定期積金

④ 貸出金残高の状況

○ 業種別貸出状況(未残・構成比)

業種別	前第3四半期連結会計期間		当第3四半期連結会計期間	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内(除く特別国際金融取引勘定分)	3,890,486	100.00	3,922,394	100.00
製造業	317,361	8.16	305,228	7.78
農業, 林業	768	0.02	640	0.02
漁業	48	0.00	500	0.01
鉱業, 採石業, 砂利採取業	230	0.01	261	0.01
建設業	103,957	2.67	106,771	2.72
電気・ガス・熱供給・水道業	18,403	0.47	19,336	0.49
情報通信業	12,189	0.31	16,467	0.42
運輸業, 郵便業	108,714	2.79	102,230	2.61
卸売業, 小売業	290,972	7.48	288,089	7.34
金融業, 保険業	149,376	3.84	146,212	3.73
不動産業, 物品賃貸業	620,211	15.94	643,806	16.41
学術研究, 専門・技術サービス業	14,791	0.38	15,617	0.40
宿泊業, 飲食業	32,605	0.84	33,653	0.86
生活関連サービス業, 娯楽業	17,888	0.46	17,331	0.44
教育, 学習支援業	9,118	0.23	8,173	0.21
医療・福祉	89,706	2.31	102,298	2.61
その他のサービス	90,926	2.34	91,655	2.34
地方公共団体	149,473	3.84	131,614	3.35
その他	1,863,738	47.91	1,892,499	48.25
特別国際金融取引勘定分	—	—	—	—
政府等	—	—	—	—
金融機関	—	—	—	—
その他	—	—	—	—
合計	3,890,486	—	3,922,394	—

(注) 「国内」とは、当社及び連結子会社であります。

(2) 経営方針・経営戦略等、経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等、事業上及び財務上の対処すべき課題

当第3四半期連結累計期間において、重要な変更及び新たに定めた事項等はありません。

(3) 主要な設備

- ① 新設、休止、大規模改修、除却、売却等について、当第3四半期連結累計期間に著しい変動があった設備は、次のとおりであります。

売却

会社名	店舗名その他	所在地	セグメントの名称	設備の内容	帳簿価額 (百万円)	売却年月
株式会社池田泉州銀行	堺事務集中センター	堺市堺区	銀行業	事務集中センター	239	2019年9月

- ② 当第3四半期連結累計期間に新たに確定した重要な設備の新設、休止、大規模改修、除却、売却等の計画は、次のとおりであります。

新設、改修

会社名	店舗名その他	所在地	区分	セグメントの名称	設備の内容	投資予定金額 (百万円)		資金調達方法	着手年月	完了 予定年月
						総額	既支払額			
株式会社池田泉州銀行	神戸支店	神戸市中央区	移転	銀行業	店舗	50	—	自己資金	2019年11月	2020年5月
池田泉州T.T証券株式会社	神戸支店	神戸市中央区	改修	その他	店舗	28	—	自己資金	2020年3月	2020年5月

(4) 研究開発活動

該当事項はありません。

3 【経営上の重要な契約等】

当第3四半期連結会計期間において、経営上の重要な契約等の決定又は締結等はありません。

第3 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

① 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	850,050,000
第1回第七種優先株式	25,000,000
計	900,000,000

(注) 計の欄には、定款で規定されている発行可能株式総数を記載しております。

② 【発行済株式】

種類	第3四半期会計期間 末現在発行数(株) (2019年12月31日)	提出日現在 発行数(株) (2020年2月7日)	上場金融商品取引所 名又は登録認可金融 商品取引業協会名	内容
普通株式	281,008,632	281,008,632	東京証券取引所 市場第一部	(注1)
第1回第七種優先株式	25,000,000	25,000,000	—	(注2、3)
計	306,008,632	306,008,632	—	—

(注) 1 完全議決権株式であり、剰余金の配当に関する請求権その他の権利内容に何ら限定のない、当社における標準となる株式です。

単元株式数は100株です。

2 資金調達を柔軟かつ機動的に行うための選択肢の多様化を図り、適切な資本政策を実行することを可能とするため、会社法第108条第1項第3号に定める内容について普通株式と異なる定めをした優先株式を発行しております。

3 第1回第七種優先株式の内容は次のとおりであります。

(1) 優先配当金

① 毎年3月31日の最終の株主名簿に記載又は記録された第1回第七種優先株式を有する株主(以下「第1回第七種優先株主」という。)又は第1回第七種優先株式の登録株式質権者(以下「第1回第七種優先登録株式質権者」という。)に対し、普通株主又は普通登録株式質権者に先立ち、第1回第七種優先株式1株につき年30円(ただし、2016年3月31日を基準日とする第1回第七種優先配当金については、第1回第七種優先株式1株につき29.51円を支払うものとする。)の金銭による剰余金の配当(かかる配当により支払われる金銭を以下「第1回第七種優先配当金」という。)を行う。ただし、当該事業年度において(2)の第1回第七種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額とする。

② 非累積条項

ある事業年度において第1回第七種優先株主又は第1回第七種優先登録株式質権者に対して支払う剰余金の配当の額が第1回第七種優先配当金の額に達しないときは、その不足額は、翌事業年度以降に累積しない。

③ 非参加条項

第1回第七種優先株主又は第1回第七種優先登録株式質権者に対しては、第1回第七種優先配当金を超えて剰余金の配当は行わない。ただし、当社が行う吸収分割手続の中で行われる会社法第758条第8号ロ若しくは同法第760条第7号ロに規定される剰余金の配当又は当社が行う新設分割手続の中で行われる同法第763条第12号ロ若しくは同法第765条第1項第8号ロに規定される剰余金の配当についてはこの限りではない。

(2) 優先中間配当金

毎年9月30日の最終の株主名簿に記載又は記録された第1回第七種優先株主または第1回第七種優先登録株式質権者に対し、普通株主または普通登録株式質権者に先立ち、次に定める額の金銭による剰余金の配当(以下「第1回第七種優先中間配当金」という。)を行う。

第1回第七種優先株式 1株につき 15円

ただし、2015年9月30日を基準日とする第1回第七種優先中間配当金については、1株につき14.51円とする。

(3) 残余財産の分配

① 残余財産を分配するときは、第1回第七種優先株主又は第1回第七種優先登録株式質権者に対し、普通株主及び普通登録株式質権者に先立ち、第1回第七種優先株式1株につき1,000円を支払う。

② 第1回第七種優先株主又は第1回第七種優先登録株式質権者に対しては、前項のほか残余財産の分配は行わない。

(4) 議決権

第1回第七種優先株主は、法令に別段の定めがある場合を除き、株主総会において議決権を有しない。

(5) 株式の併合又は分割、募集株式の割当てを受ける権利等

① 法令に別段の定めがある場合を除き、第1回第七種優先株式について株式の併合又は株式の分割を行わない。

② 第1回第七種優先株主に対し、募集株式の割当てを受ける権利又は募集新株予約権の割当てを受ける権利を与えない。

③ 第1回第七種優先株主に対し、株式無償割当て又は新株予約権の無償割当ては行わない。

(6) 普通株式を対価とする取得条項

① 2025年3月31日(以下「一斉取得日」という。)に第1回第七種優先株式の全てを取得する。この場合、かかる第1回第七種優先株式を取得するのと引換えに、各第1回第七種優先株主に対し、その有する第1回第七種優先株式数に第1回第七種優先株式1株当たりの払込金額相当額を乗じた額を下記②に定める普通株式の時価(以下「一斉取得価額」という。)で除した数の普通株式を交付するものとする。第1回第七種優先株式の取得と引換えに交付すべき普通株式の数に1株に満たない端数がある場合には、会社法第234条に従ってこれを取扱う。

② 一斉取得価額

一斉取得価額は、一斉取得日に先立つ45取引日に始まる30連続取引日(終値が算出されない日を除く。)の毎日の株式会社東京証券取引所における当社の普通株式の普通取引の終値(以下「終値」という。)の平均値に相当する金額(円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切り捨てる。)とする。但し、かかる計算の結果、一斉取得価額が下限取得価額(2015年3月23日の終値に0.8を乗じた金額(円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切り捨てた価額)とし、その価額が421円を下回る場合は、421円とする。)を下回る場合は、一斉取得価額は下限取得価額(ただし、下記③による調整を受ける。)とする。

③ 下限取得価額の調整

イ. 第1回第七種優先株式の発行後、次の各号のいずれかに該当する場合には、下限取得価額を次に定める算式(以下「下限取得価額調整式」という。)により調整する(以下、調整後の下限取得価額を「調整後下限取得価額」という。)。下限取得価額調整式の計算については、円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切り捨てる。

$$\text{調整後下限取得価額} = \text{調整前下限取得価額} \times \frac{\text{既発行普通株式数} + \frac{\text{交付普通株式数} \times \text{1株当たりの払込金額}}{\text{時価}}}{\text{既発行普通株式数} + \text{交付普通株式数}}$$

(A) 下限取得価額調整式に使用する時価(下記ハ、に定義する。以下同じ。)を下回る払込金額をもって普通株式を発行又は自己株式である普通株式を処分する場合(無償割当ての場合を含む。)(ただし、当社の普通株式の交付を請求できる取得請求権付株式もしくは新株予約権(新株予約権付社債に付されたものを含む。以下本③において同じ。))その他の証券(以下「取得請求権付株式等」という。)、又は当社の普通株式の交付と引換えに当社が取得することができる取得条項付株式もしくは取得条項付新株予約権その他の証券(以下「取得条項付株式等」という。)が取得又は行使され、これに対して普通株式が交付される場合を除く。)

調整後下限取得価額は、払込期日(払込期間が定められた場合は当該払込期間の末日とする。以下同じ。)(無償割当ての場合はその効力発生日)の翌日以降、又は株主に募集株式の割当てを受ける権利を与えるためもしくは無償割当てのための基準日がある場合はその日の翌日以降、これを適用する。

(B) 株式の分割をする場合

調整後下限取得価額は、株式の分割のための基準日に分割により増加する普通株式数(基準日における当社の自己株式である普通株式に係り増加する普通株式数を除く。)が交付されたものとみなして下限取得価額調整式を適用して算出し、その基準日の翌日以降これを適用する。

(C) 下限取得価額調整式に使用する時価を下回る価額(下記ニ、に定義する。以下本(C)、下記(D)及び(E)並びに下記ハ、(D)において同じ。))をもって当社の普通株式の交付を請求できる取得請求権付株式等を発行する場合(無償割当ての場合を含む。)

調整後下限取得価額は、当該取得請求権付株式等の払込期日(新株予約権の場合は割当日)(無償割当ての場合はその効力発生日)に、又は株主に取得請求権付株式等の割当てを受ける権利を与えるためもしくは無償割当てのための基準日がある場合はその日に、当該取得請求権付株式等の全部が当初の条件で取得又は行使されて普通株式が交付されたものとみなして下限取得価額調整式を適用して算出し、その払込期日(新株予約権の場合は割当日)(無償割当ての場合はその効力発生日)の翌日以降、又はその基準日の翌日以降、これを適用する。

上記にかかわらず、上記の普通株式が交付されたものとみなされる日において価額が確定しておらず、後日一定の日(以下「価額決定日」という。)に価額が決定される取得請求権付株式等を発行した場合において、決定された価額が下限取得価額調整式に使用する時価を下回る場合には、調整後下限取得価額は、当該価額決定日に残存する取得請求権付株式等の全部が価額決定日に確定した条件で取得又は行使されて普通株式が交付されたものとみなして下限取得価額調整式を適用して算出し、当該価額決定日の翌日以降これを適用する。

(D) 当社が発行した取得請求権付株式等に、価額がその発行日以降に修正される条件(本イ、又は下記ロ、と類似する希薄化防止のための調整を除く。)が付されている場合で、当該修正が行われる日(以下「修正日」という。)における修正後の価額(以下「修正価額」という。)が下限取得価額調整式に使用する時価を下回る場合

調整後下限取得価額は、修正日に、残存する当該取得請求権付株式等の全部が修正価額で取得又は行使されて普通株式が交付されたものとみなして下限取得価額調整式を適用して算出し、当該修正日の翌日以降これを適用する。

(E) 取得条項付株式等の取得と引換えに下限取得価額調整式に使用される時価を下回る価額をもって普通株式を交付する場合

調整後下限取得価額は、取得日の翌日以降これを適用する。ただし、当該取得条項付株式等について既に上記(C)又は(D)による取得価額の調整が行われている場合には、調整後下限取得価額は、当該取得と引換えに普通株式が交

付された後の完全希薄化後普通株式数(下記ホ. に定義する。)が、当該取得の直前の既発行普通株式数を超えるとときに限り、当該超過する普通株式数が交付されたものとみなして下限取得価額調整式を適用して算出し、取得の直前の既発行普通株式数を超えないときは、本(E)による調整は行わない。

(F) 株式の併合をする場合

調整後下限取得価額は、株式の併合の効力発生日以降、併合により減少した普通株式数(効力発生日における当社の自己株式である普通株式に係り減少した普通株式数を除く。)を負の値で表示して交付普通株式数とみなして下限取得価額調整式を適用して算出し、これを適用する。

ロ. 上記イ. (A)ないし(F)に掲げる場合のほか、合併、会社分割、株式交換又は株式移転等により、下限取得価額の調整を必要とする場合は、取締役会が適当と判断する下限取得価額に変更される。

ハ. (A) 下限取得価額調整式に使用する「時価」は、調整後下限取得価額を適用する日に先立つ45取引日目に始まる30連続取引日(終値が算出されない日を除く。)の毎日の終値の平均値に相当する金額(円位未満小数第1位まで算出し、その小数第1位を切り捨てる。)とする。なお、上記30連続取引日の間に、取得価額の調整事由が生じた場合、調整後下限取得価額は、本③に準じて調整する。

(B) 下限取得価額調整式に使用する「調整前下限取得価額」は、調整後下限取得価額を適用する日の前日において有効な下限取得価額とする。

(C) 下限取得価額調整式に使用する「既発行普通株式数」は、基準日がある場合はその日(上記イ. (A)ないし(C)に基づき当該基準日において交付されたものとみなされる普通株式数は含まない。)の、基準日がない場合は調整後下限取得価額を適用する日の1ヶ月前の日の当社の発行済普通株式数(自己株式である普通株式数を除く。)に当該下限取得価額の調整の前に上記イ. 及びロ. に基づき「交付普通株式数」とみなされた普通株式であって未だ交付されていない普通株式数を加えたものとする。

(D) 下限取得価額調整式に使用する「1株当たりの払込金額」とは、上記イ. (A)の場合には、当該払込金額(無償割当ての場合は0円)(金銭以外の財産による払込みの場合には適正な評価額)、上記イ. (B)及び(F)の場合には0円、上記イ. (C)ないし(E)の場合には価額(ただし、(D)の場合は修正価額)とする。

ニ. 上記イ. (C)ないし(E)及び上記ハ. (D)において「価額」とは、取得請求権付株式等又は取得条項付株式等の発行に際して払込みがなされた額(新株予約権の場合には、その行使に際して出資される財産の価額を加えた額とする。)から、その取得又は行使に際して当該取得請求権付株式等又は取得条項付株式等の所持人に交付される普通株式以外の財産の価額を控除した金額を、その取得又は行使に際して交付される普通株式数で除した金額をいう。

ホ. 上記イ. (E)において「完全希薄化後普通株式数」とは、調整後下限取得価額を適用する日の既発行普通株式数から、上記ハ. (C)に従って既発行普通株式数に含められている未だ交付されていない普通株式数で当該取得条項付株式等に係るものを除いて、当該取得条項付株式等の取得により交付される普通株式数を加えたものとする。

ヘ. 上記イ. (A)ないし(C)において、当該各行為に係る基準日が定められ、かつ当該各行為が当該基準日以降に開催される当社の株主総会における一定の事項に関する承認決議を停止条件としている場合には、上記イ. (A)ないし(C)の規定にかかわらず、調整後下限取得価額は、当該承認決議をした株主総会の終結の日の翌日以降にこれを適用する。

ト. 下限取得価額調整式により算出された上記イ. 第2文を適用する前の調整後下限取得価額と調整前下限取得価額との差額が1円未満にとどまるときは、取得価額の調整は、これを行わない。但し、その後下限取得価額調整式による下限取得価額の調整を必要とする事由が発生し、下限取得価額を算出する場合には、下限取得価額調整中の調整前下限取得価額に代えて調整前下限取得価額からこの差額を差し引いた額(ただし、円位未満小数第2位までを算出し、その小数第2位を切り捨てる。)を使用する。

(7) 金銭を対価とする取得条項

① 2022年7月1日以降の日で、第1回第七種優先株式の発行後に取締役会の決議で定める日(以下「取得日」という。)が到来したときは、第1回第七種優先株主又は第1回第七種優先登録株式質権者に対して、法令上可能な範囲で、第1回第七種優先株式の全部又は一部を取得することができる。但し、取締役会は、当該取締役会の開催日までの10連続取引日(開催日を含む。)の全ての日において終値が下限取得価額を下回っている場合で、かつ金融庁の事前承認を得ている場合に限り、取得日を定めることができる。この場合、当社は、第1回第七種優先株式を取得するのと引換えに、下記②に定める財産を第1回第七種優先株主に対して交付するものとする。

② 第1回第七種優先株式の取得と引換えに、第1回第七種優先株式1株につき1,000円に第1回第七種優先配当金の額を取得日の属する事業年度の初日(同日を含む。)から取得日の前日(同日を含む。)までの日数で日割り計算した額(円位未満小数第3位まで算出し、その小数第3位を四捨五入する。)(但し、第1回第七種優先株式取得日の属する事業年度において第1回第七種優先株式を有する第1回第七種優先株主又は第1回第七種優先株式の第1回第七種優先登録株式質権者に対して第1回第七種優先中間配当金を支払ったときは、その額を控除した額とする。)を加算した額の金銭を支払う。

③ 一部取得をするときは、按分比例の方法又は抽選により行う。

(8) 優先順位

第1回第七種優先配当金並びに第1回第七種優先中間配当金及び第1回第七種優先株式の残余財産の支払順位は、当社の発行する他の種類の優先株式と同順位とする。

(9) 単元株式数 100株

(10) 会社法第322条第2項に規定する定款の定め

該当事項はありません。

(11) 除斥期間

当社定款第52条の規定は、第1回第七種優先配当金及び第1回第七種優先中間配当金の支払についてこれを準用する。

(2) 【新株予約権等の状況】

① 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

② 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2019年10月1日～ 2019年12月31日	—	306,008,632	—	102,999	—	65,499

(5) 【大株主の状況】

当四半期会計期間は第3四半期会計期間であるため、記載事項はありません。

(6) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

2019年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	第1回第七種優先株式 25,000,000	—	(注) 1
議決権制限株式(自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式(その他)	—	—	—
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 276,800	—	(注) 2
完全議決権株式(その他)	普通株式 280,357,400	2,803,574	(注) 2
単元未満株式	普通株式 374,432	—	1単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	306,008,632	—	—
総株主の議決権	—	2,803,574	—

(注) 1 「第3 提出会社の状況 1 株式等の状況 (1) 株式の総数等 ② 発行済株式」の(注) 3を参照してください。

2 「第3 提出会社の状況 1 株式等の状況 (1) 株式の総数等 ② 発行済株式」の(注) 1を参照してください。

3 上記の「完全議決権株式(その他)」の欄には、株式会社証券保管振替機構名義の株式が8,300株含まれております。

また、「議決権の数」の欄に、同機構名義の完全議決権株式に係る議決権の数が83個含まれております。

② 【自己株式等】

2019年12月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 株式会社池田泉州 ホールディングス	大阪市北区茶屋町18番14号	276,800	—	276,800	0.09
計	—	276,800	—	276,800	0.09

2 【役員の状況】

前事業年度の有価証券報告書の提出日後、当四半期累計期間における役員の異動はありません。

第4 【経理の状況】

- 1 当社の四半期連結財務諸表は、「四半期連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(平成19年内閣府令第64号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 2 当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、第3四半期連結会計期間(自 2019年10月1日 至 2019年12月31日)及び第3四半期連結累計期間(自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)に係る四半期連結財務諸表について、EY新日本有限責任監査法人の四半期レビューを受けております。

1 【四半期連結財務諸表】

(1) 【四半期連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (2019年12月31日)
資産の部		
現金預け金	743,563	780,142
コールローン及び買入手形	7,127	5,270
買入金銭債権	100	100
商品有価証券	112	80
金銭の信託	27,003	26,941
有価証券	612,741	607,721
貸出金	※1 3,913,086	※1 3,922,394
外国為替	5,514	5,556
その他資産	79,939	79,925
有形固定資産	40,093	38,461
無形固定資産	5,152	5,158
退職給付に係る資産	13,512	14,449
繰延税金資産	8,403	5,851
支払承諾見返	8,492	8,300
貸倒引当金	△13,965	△10,936
資産の部合計	5,450,878	5,489,418
負債の部		
預金	4,945,548	4,986,783
債券貸借取引受入担保金	87,321	38,770
借入金	123,077	164,154
外国為替	408	370
その他負債	45,960	45,997
賞与引当金	1,225	746
退職給付に係る負債	146	151
役員退職慰労引当金	8	4
睡眠預金払戻損失引当金	611	606
ポイント引当金	254	176
債務保証損失引当金	371	—
偶発損失引当金	799	848
特別法上の引当金	4	5
繰延税金負債	184	217
支払承諾	8,492	8,300
負債の部合計	5,214,416	5,247,134
純資産の部		
資本金	102,999	102,999
資本剰余金	42,103	42,105
利益剰余金	78,804	78,397
自己株式	△831	△93
株主資本合計	223,074	223,408
その他有価証券評価差額金	9,285	14,477
繰延ヘッジ損益	△136	△138
退職給付に係る調整累計額	2,197	2,212
その他の包括利益累計額合計	11,346	16,551
新株予約権	71	74
非支配株主持分	1,969	2,250
純資産の部合計	236,462	242,284
負債及び純資産の部合計	5,450,878	5,489,418

(2) 【四半期連結損益計算書及び四半期連結包括利益計算書】

【四半期連結損益計算書】

【第3四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自2018年4月1日 至2018年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自2019年4月1日 至2019年12月31日)
経常収益	67,462	65,548
資金運用収益	35,306	32,944
(うち貸出金利息)	30,438	29,552
(うち有価証券利息配当金)	4,470	2,892
役務取引等収益	15,668	16,131
その他業務収益	2,601	4,663
その他経常収益	※1 13,887	※1 11,809
経常費用	62,011	61,417
資金調達費用	4,035	2,229
(うち預金利息)	1,420	1,131
役務取引等費用	4,802	5,616
その他業務費用	4,705	5,651
営業経費	36,614	35,828
その他経常費用	※2 11,853	※2 12,090
経常利益	5,450	4,131
特別利益	9	363
固定資産処分益	9	363
特別損失	101	204
固定資産処分損	50	18
減損損失	49	59
金融商品取引責任準備金繰入額	1	1
その他の特別損失	—	※3 125
税金等調整前四半期純利益	5,359	4,290
法人税、住民税及び事業税	892	635
法人税等調整額	625	161
法人税等合計	1,518	796
四半期純利益	3,840	3,493
非支配株主に帰属する四半期純利益又は非支配株主に帰属する四半期純損失(△)	64	△7
親会社株主に帰属する四半期純利益	3,775	3,501

【四半期連結包括利益計算書】

【第3四半期連結累計期間】

(単位：百万円)

	前第3四半期連結累計期間 (自 2018年4月1日 至 2018年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)
四半期純利益	3,840	3,493
その他の包括利益	△1,483	5,205
その他有価証券評価差額金	△1,696	5,192
繰延ヘッジ損益	△7	△2
退職給付に係る調整額	220	15
四半期包括利益	2,357	8,699
(内訳)		
親会社株主に係る四半期包括利益	2,292	8,706
非支配株主に係る四半期包括利益	64	△7

【注記事項】

(連結の範囲又は持分法適用の範囲の変更)

当第3四半期連結累計期間(自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)

前連結会計年度において連結子会社であった池田泉州モーゲージサービス株式会社及びエイ・ディ安定収益追求ファンド匿名組合は、清算が終了したため、第1四半期連結会計期間より連結の範囲から除外しております。

関西イノベーションネットワーク投資事業有限責任組合に出資し、第2四半期連結会計期間より連結の範囲に含めております。

(追加情報)

当社は、従業員持株会に信託を通じて自社の株式を交付する取引を行っております。

2015年12月導入の信託型従業員持株インセンティブ・プラン

① 取引の概要

当社は、池田泉州銀行従業員に対する当社の中長期的な企業価値向上へのインセンティブの付与を目的として、「信託型従業員持株インセンティブ・プラン」(以下、「本プラン」という。)を導入してはりましたが、2019年12月24日をもって当該信託は終了しております。

本プランは、「池田泉州銀行従業員持株会」(以下、「持株会」という。)に加入するすべての従業員を対象とするインセンティブ・プランです。本プランでは、当社が信託銀行に「池田泉州銀行従業員持株会信託」(以下、「従持信託」という。)を設定し、従持信託は、今後5年間にわたり持株会が取得すると見込まれる数の当社株式を予め取得します。その後は、従持信託から持株会に対して継続的に当社株式の売却が行われるとともに、信託終了時点で従持信託内に株式売却益相当額が累積した場合には、当該株式売却益相当額が残余財産として受益者適格要件を満たす者に分配されます。

なお、当社は、従持信託が当社株式を取得するための借入に対し保証することになるため、当社株価の下落により従持信託内に株式売却損相当額が累積し、信託終了時点において従持信託内に当該株式売却損相当の借入金残債がある場合は、かかる保証行為に基づき、当社が当該残債を弁済することになります。

② 信託に残存する自社の株式

従持信託に残存する当社株式を、従持信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く)により、純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、前連結会計年度730百万円、1,546千株であります。当第3四半期連結会計期間においては、信託が終了しているため、信託に残存する自社の株式はありません。

③ 総額法の適用により計上された借入金帳簿価額

前連結会計年度825百万円であります。当第3四半期連結会計期間においては、信託が終了しているため、計上された借入金帳簿価額はありません。

(四半期連結貸借対照表関係)

※1 貸出金のうち、リスク管理債権は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2019年3月31日)	当第3四半期連結会計期間 (2019年12月31日)
破綻先債権額	1,387百万円	1,298百万円
延滞債権額	29,295百万円	24,880百万円
3カ月以上延滞債権額	111百万円	100百万円
貸出条件緩和債権額	4,875百万円	5,509百万円
合計額	35,670百万円	31,789百万円

なお、上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

(四半期連結損益計算書関係)

※1 その他経常収益には、次のものを含んでおります。

	前第3四半期連結累計期間 (自 2018年4月1日 至 2018年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)
償却債権取立益	798百万円	961百万円
金銭の信託運用益	94百万円	54百万円
貸倒引当金戻入益	1,303百万円	179百万円
株式等売却益	3,284百万円	1,644百万円

※2 その他経常費用には、次のものを含んでおります。

	前第3四半期連結累計期間 (自 2018年4月1日 至 2018年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)
貸出金償却	3,566百万円	2,931百万円
株式等償却	390百万円	419百万円
金銭の信託運用損	297百万円	90百万円
保証協会負担金	272百万円	333百万円

※3 その他の特別損失は、子会社である池田泉州銀行における抜本的な店舗機能見直しに基づく店舗移転等に係る一時費用であります。

(四半期連結キャッシュ・フロー計算書関係)

当第3四半期連結累計期間に係る四半期連結キャッシュ・フロー計算書は作成しておりません。なお、第3四半期連結累計期間に係る減価償却費(のれんを除く無形固定資産に係る償却費を含む。)及びのれんの償却額は、次のとおりであります。

	前第3四半期連結累計期間 (自 2018年4月1日 至 2018年12月31日)	当第3四半期連結累計期間 (自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)
減価償却費	4,007百万円	4,364百万円
のれんの償却額	115百万円	20百万円

(株主資本等関係)

前第3四半期連結累計期間(自 2018年4月1日 至 2018年12月31日)

1 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
2018年6月26日 定時株主総会	普通株式	2,106	7.50	2018年3月31日	2018年6月27日	その他利益 剰余金
	第三種優先株式	262	35.00	2018年3月31日	2018年6月27日	その他利益 剰余金
	第1回第七種 優先株式	375	15.00	2018年3月31日	2018年6月27日	その他利益 剰余金
2018年11月13日 取締役会	普通株式	2,107	7.50	2018年9月30日	2018年12月3日	その他利益 剰余金
	第三種優先株式	262	35.00	2018年9月30日	2018年12月3日	その他利益 剰余金
	第1回第七種 優先株式	375	15.00	2018年9月30日	2018年12月3日	その他利益 剰余金

(注) 1 2018年6月26日定時株主総会決議による普通株式の配当金の総額には、池田泉州銀行従業員持株会信託が保有する自社の株式に対する配当金21百万円が含まれております。

2 2018年11月13日取締役会決議による普通株式の配当金の総額には、池田泉州銀行従業員持株会信託が保有する自社の株式に対する配当金17百万円が含まれております。

2 基準日が当第3四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第3四半期連結会計期間の末日後となるもの
該当事項はありません。

当第3四半期連結累計期間(自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)

1 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日	配当の原資
2019年6月25日 定時株主総会	普通株式	2,105	7.50	2019年3月31日	2019年6月26日	その他利益 剰余金
	第1回第七種 優先株式	375	15.00	2019年3月31日	2019年6月26日	その他利益 剰余金
2019年11月14日 取締役会	普通株式	1,052	3.75	2019年9月30日	2019年12月2日	その他利益 剰余金
	第1回第七種 優先株式	375	15.00	2019年9月30日	2019年12月2日	その他利益 剰余金

(注) 1 2019年6月25日定時株主総会決議による普通株式の配当金の総額には、池田泉州銀行従業員持株会信託が保有する自社の株式に対する配当金11百万円が含まれております。

2 2019年11月14日取締役会決議による普通株式の配当金の総額には、池田泉州銀行従業員持株会信託が保有する自社の株式に対する配当金1百万円が含まれております。

2 基準日が当第3四半期連結累計期間に属する配当のうち、配当の効力発生日が当第3四半期連結会計期間の末日後となるもの

該当事項はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

前第3四半期連結累計期間(自 2018年4月1日 至 2018年12月31日)

1 報告セグメントごとの経常収益及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	四半期連結 損益計算書 計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する 経常収益	55,691	7,763	63,454	4,008	67,462	—	67,462
セグメント間の 内部経常収益	872	87	960	2,165	3,125	△3,125	—
計	56,563	7,851	64,414	6,173	70,588	△3,125	67,462
セグメント利益	5,306	288	5,595	437	6,032	△581	5,450

(注) 1 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 「銀行業」の区分は信用保証業務を含んでおります。

3 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、証券業務及びクレジットカード業務等を含んでおります。

4 セグメント利益の調整額△581百万円は、セグメント間の取引消去に伴うものであります。

5 セグメント利益は、四半期連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

2 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

当第3四半期連結累計期間(自 2019年4月1日 至 2019年12月31日)

1 報告セグメントごとの経常収益及び利益又は損失の金額に関する情報

(単位:百万円)

	報告セグメント			その他	合計	調整額	四半期連結 損益計算書 計上額
	銀行業	リース業	計				
経常収益							
外部顧客に対する 経常収益	53,562	8,215	61,777	3,770	65,548	—	65,548
セグメント間の 内部経常収益	1,357	118	1,476	1,548	3,025	△3,025	—
計	54,920	8,334	63,254	5,319	68,573	△3,025	65,548
セグメント利益又は 損失(△)	4,816	△31	4,784	△150	4,634	△502	4,131

(注) 1 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 「銀行業」の区分は信用保証業務を含んでおります。

3 「その他」の区分は報告セグメントに含まれていない事業セグメントであり、証券業務及びクレジットカード業務等を含んでおります。

4 セグメント利益又は損失(△)の調整額△502百万円は、セグメント間の取引消去に伴うものであります。

5 セグメント利益又は損失(△)は、四半期連結損益計算書の経常利益と調整を行っております。

2 報告セグメントごとの固定資産の減損損失又はのれん等に関する情報

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

3 報告セグメントの変更等に関する事項

当社グループは、従来、報告セグメントが銀行業のみであり、当社グループの業績における「その他」の重要性が乏しいため、記載を省略しておりましたが、「リース業」について量的な重要性が増したため、第1四半期連結会計期間より報告セグメントを「銀行業」及び「リース業」に変更しております。

なお、前第3四半期連結累計期間のセグメント情報については、変更後の区分方法により作成したものを記載しております。

(金融商品関係)

企業集団の事業の運営において重要なものであり、前連結会計年度の末日に比して著しい変動が認められるものは、次のとおりであります。

前連結会計年度 (2019年3月31日)

科目	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
有価証券	601,853	601,858	5
貸出金	3,913,086		
貸倒引当金	△12,627		
	3,900,459	3,909,209	8,750
預金	4,945,548	4,945,535	△12
債券貸借取引受入担保金	87,321	87,321	—
借入金	123,077	123,078	1

当第3四半期連結会計期間 (2019年12月31日)

科目	四半期連結貸借対照表 計上額 (百万円)	時価 (百万円)	差額 (百万円)
有価証券	596,297	596,297	—
貸出金	3,922,394		
貸倒引当金	△9,264		
	3,913,130	3,914,967	1,836
預金	4,986,783	4,986,756	△26
債券貸借取引受入担保金	38,770	38,770	—
借入金	164,154	164,144	△9

(注) 1 有価証券の時価の算定方法

株式は取引所の価格、債券は取引所の価格又は取引金融機関から提示された価格によっております。投資信託は、公表されている基準価格によっております。

自行保証付私募債は、貸出金と同様の方法により算定しております。

なお、その他有価証券で時価のあるものに関する注記事項については、「(有価証券関係)」に記載しております。

2 貸出金の時価の算定方法

貸出金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない限り、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を同様の新規貸出を行った場合に想定される利率で割り引いて時価を算定しております。なお、約定期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フローの現在価値又は担保及び保証による回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は四半期連結決算日(連結決算日)における四半期連結貸借対照表(連結貸借対照表)上の債権等計上額から貸倒引当金計上額を控除した金額に近似しており、当該価額を時価としております。

貸出金のうち、当該貸出を担保資産の範囲内に限るなどの特性により、返済期限を設けていないものについては、返済見込み期間及び金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、帳簿価額を時価としております。

3 預金の時価の算定方法

要求払預金については、四半期連結決算日(連結決算日)に要求された場合の支払額(帳簿価額)を時価とみなしております。また、定期預金の時価は、一定の期間ごとに区分して、将来のキャッシュ・フローを割り引いて現在価値を算定しております。その割引率は、新規に預金を受け入れる際に使用する利率を用いております。なお、預入期間が短期間(1年以内)のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

4 債券貸借取引受入担保金の時価の算定方法

約定期間が短期間（1年以内）であり、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

5 借入金の時価の算定方法

借入金のうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当社及び連結子会社の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額を時価としております。固定金利によるものは、一定の期間ごとに区分した当該借入金の元利金の合計額を同様の借入において想定される利率で割り引いて現在価値を算定しております。なお、約定期間が短期間（1年以内）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。

(有価証券関係)

※1 企業集団の事業の運営において重要なものであり、前連結会計年度の末日に比して著しい変動が認められるものは、次のとおりであります。

※2 四半期連結貸借対照表の「有価証券」について記載しております。

その他有価証券

前連結会計年度 (2019年3月31日)

	取得原価(百万円)	連結貸借対照表計上額 (百万円)	差額(百万円)
株式	16,933	28,097	11,163
債券	379,892	380,966	1,073
国債	63,958	64,115	156
地方債	60,068	60,118	50
短期社債	—	—	—
社債	255,864	256,732	867
その他	191,904	191,789	△114
合計	588,730	600,853	12,122

当第3四半期連結会計期間 (2019年12月31日)

	取得原価(百万円)	四半期連結貸借対照表 計上額(百万円)	差額(百万円)
株式	15,660	27,308	11,648
債券	436,260	436,753	492
国債	28,951	28,993	41
地方債	109,880	109,860	△20
短期社債	—	—	—
社債	297,428	297,899	470
その他	124,643	132,235	7,591
合計	576,564	596,297	19,732

(注) その他有価証券のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込みがあると認められないものについては、当該時価をもって四半期連結貸借対照表計上額(連結貸借対照表計上額)とするとともに、評価差額を当第3四半期連結累計期間(連結会計年度)の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度における減損処理額は、405百万円(全て株式)であります。

当第3四半期連結累計期間における減損処理額は、439百万円(うち、株式389百万円、社債50百万円)であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、取得原価に比べて時価が50%以上下落した場合、または、時価が30%以上50%未満下落した場合においては、過去の一定期間における時価の推移並びに当該発行会社の信用リスク等を勘案した基準により行っております。

(デリバティブ取引関係)

企業集団の事業の運営において重要なものであり、前連結会計年度の末日に比して著しい変動が認められるものは、次のとおりであります。

(1) 通貨関連取引

前連結会計年度 (2019年3月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
金融商品取引所	通貨先物	—	—	—
	通貨オプション	—	—	—
店頭	通貨スワップ	47,944	185	185
	為替予約	10,770	8	8
	通貨オプション	75,584	△0	361
	その他	—	—	—
合計		—	194	555

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

なお、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年7月29日)等に基づきヘッジ会計を適用している通貨スワップ取引等については、上記記載から除いております。

当第3四半期連結会計期間 (2019年12月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
金融商品取引所	通貨先物	—	—	—
	通貨オプション	—	—	—
店頭	通貨スワップ	56,048	153	153
	為替予約	8,110	△28	△28
	通貨オプション	80,776	—	428
	その他	—	—	—
合計		—	125	553

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を四半期連結損益計算書に計上しております。

なお、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別監査委員会報告第25号 平成14年7月29日)等に基づきヘッジ会計を適用している通貨スワップ取引等については、上記記載から除いております。

(1 株当たり情報)

1 株当たり四半期純利益及び算定上の基礎並びに潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益及び算定上の基礎は、次のとおりであります。

		前第 3 四半期連結累計期間 (自 2018年 4 月 1 日 至 2018年12月31日)	当第 3 四半期連結累計期間 (自 2019年 4 月 1 日 至 2019年12月31日)
(1) 1 株当たり四半期純利益	円	11.27	11.16
(算定上の基礎)			
親会社株主に帰属する四半期純利益	百万円	3,775	3,501
普通株主に帰属しない金額	百万円	637	375
うち取締役会決議による第三種優先株式配当額	百万円	262	—
うち取締役会決議による第 1 回第七種優先株式配当額	百万円	375	375
普通株式に係る親会社株主に帰属する四半期純利益	百万円	3,138	3,126
普通株式の期中平均株式数	千株	278,436	279,947
(2) 潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益	円	10.56	10.48
(算定上の基礎)			
親会社株主に帰属する四半期純利益調整額	百万円	375	375
うち取締役会決議による第 1 回第七種優先株式配当額	百万円	375	375
普通株式増加数	千株	54,093	54,093
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益の算定に含めなかった潜在株式で、前連結会計年度末から重要な変動があったものの概要		—	—

(注) 株主資本において自己株式として計上されている池田泉州銀行従業員持株会信託に残存する自社の株式は、1 株当たり四半期純利益及び潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております。

1 株当たり四半期純利益及び潜在株式調整後 1 株当たり四半期純利益の算定上、控除した当該自己株式の期中平均株式数は、前第 3 四半期連結累計期間 2,477 千株、当第 3 四半期連結累計期間 776 千株であります。

(重要な後発事象)

該当ありません。

2 【その他】

中間配当

2019年11月14日開催の取締役会において、第11期の中間配当につき次のとおり決議しました。

中間配当金額	1,427百万円	
1 株当たりの中間配当金	普通株式	3 円75 銭
	第 1 回第七種優先株式	15 円00 銭

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の四半期レビュー報告書

2020年2月7日

株式会社池田泉州ホールディングス
取締役会 御中

EY新日本有限責任監査法人

指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	南	波	秀	哉	印
指定有限責任社員 業務執行社員	公認会計士	刀	禰	哲	朗	印

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、「経理の状況」に掲げられている株式会社池田泉州ホールディングスの2019年4月1日から2020年3月31日までの連結会計年度の第3四半期連結会計期間（2019年10月1日から2019年12月31日まで）及び第3四半期連結累計期間（2019年4月1日から2019年12月31日まで）に係る四半期連結財務諸表、すなわち、四半期連結貸借対照表、四半期連結損益計算書、四半期連結包括利益計算書及び注記について四半期レビューを行った。

四半期連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して四半期連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない四半期連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した四半期レビューに基づいて、独立の立場から四半期連結財務諸表に対する結論を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期レビューの基準に準拠して四半期レビューを行った。

四半期レビューにおいては、主として経営者、財務及び会計に関する事項に責任を有する者等に対して実施される質問、分析的手続その他の四半期レビュー手続が実施される。四半期レビュー手続は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して実施される年度の財務諸表の監査に比べて限定された手続である。

当監査法人は、結論の表明の基礎となる証拠を入手したと判断している。

監査人の結論

当監査法人が実施した四半期レビューにおいて、上記の四半期連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる四半期連結財務諸表の作成基準に準拠して、株式会社池田泉州ホールディングス及び連結子会社の2019年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する第3四半期連結累計期間の経営成績を適正に表示していないと信じさせる事項がすべての重要な点において認められなかった。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

(注) 1 上記は四半期レビュー報告書の原本に記載された事項を電子化したものであり、その原本は当社(四半期報告書提出会社)が別途保管しております。

2 XBR Lデータは四半期レビューの対象には含まれていません。

【表紙】

【提出書類】	確認書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条の4の8第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2020年2月7日
【会社名】	株式会社池田泉州ホールディングス
【英訳名】	Senshu Ikeda Holdings, Inc.
【代表者の役職氏名】	取締役社長兼CEO 鶴川 淳
【最高財務責任者の役職氏名】	—
【本店の所在の場所】	大阪市北区茶屋町18番14号
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

1 【四半期報告書の記載内容の適正性に関する事項】

当社取締役社長兼CEO鶴川淳は、当社の第11期第3四半期（自 2019年10月1日 至 2019年12月31日）の四半期報告書の記載内容が金融商品取引法令に基づき適正に記載されていることを確認いたしました。

2 【特記事項】

確認に当たり、特記すべき事項はありません。

